

ひよこ大好きマンが行  
く～HUNTER×HUNTER～

ウォント

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ひよこを愛しちゃつてる日本人 杉田翔！

ある日ひよこのガンガンで頭を打つて死んじゃつた！ふえ／ん／＼／＼かけり、どうなつ  
ちやうの＼？！

はつ！目が覚めたら一人で浮いてた！と思つたら現れたなんか偉そうなイケメン！  
(爆ぜるべし)

なんか色々聞かれて、蹴られておとされちゃつた！(痔なんだよ!!)

気がついたら公爵家の長男坊になつてた！

名前のHはひよこのHじゃなくて、ヒュラディのHだつたよ！がーん(TーT)！

でも、ひよこ持つてきてくれる父上大好き！

（将来的に）イケメンに産んでくれてありがとう母上！

つて！ここつてば、HUNTER×HUNTERの世界だ！  
きやう！かけり、死んじやうよおう！

オレの命は紙より重いぞつ！ぶんぶん！（ \*、ω、）

エツ母上倒れたの？！余命一年？！薬草的なアレはハンターにならなきや入れない場所  
にあるの？！しかも血族じやないと効果ないの？！大変！母上待つて！オレ母上のため  
に頑張つちやうよ！！

\*

そんな話です（大嘘）

目

ひよこひよこ!!

ひよこ大好きマンが出動

ひよこ大好きマンの旅路

次

10 6 1

# ひよこひよこ!!

オレはひよこが好きだ。大好きだ。愛してる。

昔流行ったカラーひよこを買い占めるほど愛してる。

幸いにも実家は養鶏農家で、当時12歳のオレが買い占めても損害はオレの財布がすっからかんになるくらいだった。

部屋は基本黄色く、ベットと絨毯以外はすべてひよこで構成されている。

棚の中にひよこの人形、壁には歴代のひよこたち。ベットのふちにはたくさんのがこの人形が。

自分でもイカれていると思う。けれどやめられない。

なにもひよこだけを愛しているわけではない。中籠ももちろん、鶏だって愛している。

突かれてオレが痔になろうが愛している。頭にフンを落とされようが愛している。

そんなひよこ大好きなオレはクラスでも浮いていた……ということはなかつた。別にひよこがかわいそうだから卵を食べるなんて言わないし、むしろひよことなれなかつた卵たちを美味しく食べててくれという勢いだ。

そして友達とゲームセンターに行つたオレは運命の出会いを果たした。  
ぽつんと置かれていたUFOキヤツチャー。

手乗りサイズよりも小さなカラフルなひよこの人形。

当時18歳のオレは真顔で財布から1万円札を取り出して両替機ですべて百円に崩した。

幸いにもオレはUFOキヤツチャーが得意で、一度に五四ほど取るのを繰り返した。  
呆れ目の友達は帰ろうとしていたが、UFOキヤツチャーで○N E P I E C E の  
フィギュアをとつて見せると満足げに待つていてくれた。

流石に一人では寂しい。

袋いっぱいにひよこを入れ、オレは大満足だつた。

友達も大満足だつた。

うきうきしながら家に帰り、即座に部屋に飾つた。

ベットに上がり、ふわふわのひよこを眺める。

「ふふ…んふふふふ…」

ばたばたと悶えているとらガタンと棚に足がぶつかつた。

そしてことんと何かがずれる音。

上を向くと、ひよこのガンガンが頭上から降つてくるところだつた。

頭に直撃しそこでおそらくオレは死んだんだろう。

\*\*\*

「よお、起きたかカス」

回想していると、ゴスッと頭にステッキが振り下ろされた。

ふと見ると、いつの間にいたのか金髪碧眼のイケメンがいた。

なんだか偉そうだ。見た目からしてオレよりも年上だろう。

「てめえは死んだ。それは理解してるよな。理解してないなら理解しろ0. 1秒はい終了理解したな。」

なんと理不尽だ。

しかしやはり死んだのか。

悔いは…親孝行できなかつたことと、孵化しそうな卵と、友達が泣いていないか、だな。

「てめえは生き物を大切にしていた。だから権利をやる。生まれ変わつたら、なにになりたい。」

生まれ変わつたら? そんなの決まっている。

「生まれ変わつたら、人間になりたいです。」

「ほう…意外だな、ひよこになりたいとでもほざくかと思つたが…」

「ひよこになつたらひよこを愛でられないじゃないですか。ひよこを愛でられる人間になりたいです。」

そうか、といつてなにやら紙に書き出したイケメンのEさん（仮）。

「よしもう良い。行け。」

「へ？」

どか、と尻を蹴られて滑るように進み始めた。

「喜べ！てめえの最後に触れたものを――」

聞こえない。

訳もわからぬまま、意識が消えた。

\*\*\*

テリーベル・H・ハボレイ

男、6歳、将来有望、貴族。

ひよこが異常なほどに好き

それが今のオレ、テリーベルだ。

貴族と言つても色々あるらしく、ウチは大体四国くらいの面積の領土を持つてゐるらしい。

公爵家だとか。

ちなみにミドルネームのHはひよこのHかと期待したが、ヒュラディのHだそうだ。  
期待させやがつて…！でもひよこを持つてきてくれる父上大好き！

因みにこの世界にはハンターという男子憧れの職業がある。

これさえあればなんか色々便利らしい。

へー

そして新聞では幻影旅団がどうとか騒いでいる。

幻影旅団。聞いたことがないだろうか。

そう、盗賊団のくせして美形集団、性格イケメン集団の集まりである。

：イケメン集団の集まりって集まりの集まりってことだよね。

そう、なんとオレはHUNTER×HUNTERの世界へと転生したらしいのだ!!!  
ふざけんな！死ぬだろ！

# ひよこ大好きマンが出動

テリーベルきゅん10歳！野原を駆け巡る、純粋キャピキャピな男の子だぞっ！今日はおとうさまとおじいさまとおばあさまにお呼び出しぐらつちやつた☆えくん、こわいよお><

母様が倒れた。原因は体力の過激な消耗らしい。

い、一体ナニをしたんだ…とおぼつちやまテリーベルはきよどるもの、父様の深刻そうな表情とお爺様の悲しそうな顔にそんな下ネタも言える雰囲気じゃない。

呼び出されて早々倒れただなんて聞いても現実味が湧かない。嘘をつくくなクソツタレと言いたいところだが真っ赤な顔で眠っている母様を見るにマジらしい。お祖母様なんてプルプル震えちゃってるし、お爺様も口を噛み締めてプルプルしちゃってる。

「と、とーちゃん…」

「お父様と呼べ。ヒュラデイ。……なあ、ヒュラデイ。頼みがあるんだ。」

「なんだいお父様…」

「口調を直しなさい。いいかい、まずはテリーベル、お前にハンターになつてもらいたい。」

「突然すぎやしませんことお父様」

「ちゃんとした口調にしなさい。いいかい、そして秘薬…というか薬草を手に入れても  
らいたい。」

お祖母様が真っ赤な顔で崩れ落ちた。だ、大丈夫かババア!!  
「お父様、わたくしの話は聞いてくれないのね。」

「やめなさい。」

「はい。」

割と本気で怒られた。というか母様も震えてる。おい爺様、今吹き出さなかつたか?  
なあ。

「場所はヒミツだ。自分で探しなさい。」

「待つて、ねえ待つてくださいお父様。母様死にかけですわよ? ヒ・ミ・ツ☆とか悠長な  
氣と言つてる場合ですか。普通にハンターに依頼したらどうですか?」

「それじやダメなのじやよ、リーベ:」

「お爺様:」

「なんか、あれじや。親族が手にしなきやダメ系の薬草なんじやよ。あとーそれと、  
えーっと、そうじや、ハンターでなければ行けぬ場所にあるのじや。」

「……。」

親族が手にしなきやダメ系の薬草とかなにそれ。

というかめつちや考えてなかつた？

遂に父様が崩れ落ちた。心なしか母様の顔がさらに赤くなり息も荒い気がする。そう、笑いをこらえているみたいに。

「…それでは爺様が行けばいいのでは？ 確かハンタ」

「ええい！ いいから往くのじや！ ほれ荷物と地図じや！ 申し込みは既に済ませてあるから、無事に帰るのじやぞ！」

「健闘を祈るぞ、ヒュラディイ！」

「おいコラ」

荷物を持たされ、いつかの如くぼーんと窓から放り出された。

心得ておりますと言わんばかりにいい笑顔でサムズアップした何故かカウボーイの姿をしているマーチョ。

「な、なあマーチョ、お前確か料理長だよな？」

「馬に乗つたことはありますので問題ありませんよ。ひつはつは！」

ああ、この妙な笑い方はマーチョだ。間違いない。

「んべつ！」

ガトンツ！と急に馬車が動く。おいおいどこ走つてんだ？

体勢を崩したまま外を見る。

岩場だつた。

「ムーチョ！おい、おいムーチョ?!どこ走つてんだお前、これ馬車！馬車だぞ！後ろに車ついてんの、というかなんで馬車あ?!」

「ひはっ！岩場ですなあ！ザバン市まで突つ走りますぞう！馬車は单なる当主様のご趣味です、ぞつ！」

「うううううううう!!!!」

浮遊して、着地!。身が持つとはとても思えないぞ、こんな運転じや…！

# ひよこ大好きマンの旅路

ガタガタと揺られ時には放り出され氣を失い、目が覚めると海を走っていた。

「!!!」

「お目覚めですかな、坊ちゃん！」  
「な、な、な、……！」

何を言つて いるのかわから ないと思 うが、海を走つて いた。

本當なんだ、信じてくれ。

キラキラと太陽に輝くエメラルドグリーンの海。それを馬車が搔き分けて進んで  
いつている。

まるでこれが当たり前と言わんばかりに、進んでいる。

「マーチョ！おま、なんだこれ！」

「ひつはつはつはつは！見てわかりませぬかな、海を走つておるのでぞ！」

「そうじやない、いや、そうだけどそうじやなくて!!」

縁にしがみついてマーチョを見る。青い目をキラキラと輝かせてとても楽しそうだ。

栗毛の馬：馬？馬かこれ？

気にしていなかつたがよく見ると何かおかしい。

栗毛なのだが、その肉体はゴリゴリムキムキの筋肉に覆われている。筋肉こそ正義と言わんばかりに、筋肉だ。

白い歯をむき出しにしたその形相はちよつと…いやかなり怖い。目もどこか剥いでいる。何を見ているのかわからない。前を見ろ、前を。

「あ、あの…マーチョ?」

「ひつはーつ!!いいですぞ、その調子ですぞ、魔獸たちよ!」

「おい!今魔獸って言わなかつたか?!」

「ひーつはつは!氣のせいですな!まさかこの可愛らしい栗毛の馬たちが魔獸などと

!」

「いや…うわこつち見た」

ぎよろりと白目の割合が多いくりくり…いや、ぎよろぎよろとした目がこちらを捉え、にたりと笑つた気がした。とても怖い。

全く、ハボレイ家はどんだけ常識外れなんだ…ああ、そういえばマーチョに聞いてみようか。

「なあマーチョ!」

「なんですかな?」

「母様は本当に病気なのか?!」

「病気ですと?!あの奥様が！笑わせないでくださいな坊ちゃん！絶対にありえないですな!!」

はい確定ウソだ。

ということはあれは茶番？茶番なのか？薄々勘付いてはいたけど下手すぎでしょ：ん？ならハンター試験を受けさせる口実にあんなことを？言つてくれれば受けるのに。

「ちなみに坊ちゃん！今回のハンター試験は2日後ですぞ！ついでに2日後といえばぴ

いな殿の卵が羽化する日ですね!!ひつはつは！残念でしたな坊ちゃん！」

「やだあああああ!!!なんでえええ!!!帰る!!!!ぼくかえるううううう!!!!ああああああ

!!!!

無理やり送り出したのはこういう事だつたのか！クソつ！ハボレイ家なんて嫌いだつ！！

僕の叫びも虚しく魔獸の引く馬車はどんどん進んでいく。ああ、ああびいな、びーたらん。きみたちの愛の結晶はどれほど美しく可愛らしく羽化するのだろう：見られないのが残念で…

「うわああああああん!!!!マーチョおおお!!!かえる、帰るぞおおお!!!!ぴーたんんんんんんんんん!!!!」

「ダメですな、坊ちゃんやーこのマーチョめはザバン市に坊ちゃんを送り届けるようにと言われておりますゆえ！」

「クソつ！せめて、せめて生まれる子には「ぴっこちゃん」と名付けろ！」

「奥様がピレーヌ~~姓~~名付けると聞かなかつたので無理ですな!!ひつはつは!!」

「はああああああ!!!」

ぐつたりとした僕を連れて馬車は走る。途中嵐に会い、船とぶつかつたけど僕は無事にザバン市につきました。

カツポカツポと馬：いや、魔獣が蹄を鳴らしてザバン市を歩く。

異様な光景だろうに、街の人は一瞬ぎょつとするも、ハボレイの家紋を見てすぐに納得していく。

：い、一体ハボレイ家はなにをしたんだ：

そうして魔獣と魔獣を操る御者モドキマーチョといたいけな嬢い美少年を乗せた馬車はザバン市中央へとたどり着いた。